10/5/2007

＊キリスト教学演習　（宗教と科学）　＊＊＊＊　　S.　Ashina

Ｖ．Eschatologische Perspektiven auf die Zukunft des Universums

S.83-84

テンプルトン財団のシンポジウム「遠い未来の宇宙－宇宙的展望からの終末論－」

神学者としての発言、終末論的展望について

キリスト教的終末論は常に時々の世界像の文脈で展開されてきたが、近代以降（近代科学の進展によって)、神学は世界像の問いから退却し、人格的実存や道徳の問いへと向かう傾向を強めた。また、人間的終末論と宇宙的終末論の一致は望むべくもない。科学者も神学者相互に無関心。しかし、この状態には満足できない。新しい自然神学－自然科学の認識は神について何かを語っているし、神学的洞察は自然について何かを語っている－が必要である。その根拠は、人間の知性と宇宙の知解可能性との対応の中にある。

１．Theologische Ursprünge eschatologoscher Perspektiven auf die Zukunft des Universums

神学の終末論的地平は、一般的な世界観察からではなく、特定の神経験、根底・経験－経験的出来事において、神が自らを啓示し、その人間的交わりから宗教的アイデンティティが獲得される－から獲得された。

古代イスラエルにとっての「出エジプトの出来事」

キリスト教にとっての「キリストの出来事」

ティリッヒ：歴史の意味付与原理としての「歴史の中心」

↓

歴史意識・歴史哲学

特定の歴史的な根底的経験は、最初から、一般的経験の地平と普遍的な未来待望を含意していた。それは永遠の神の時間的経験だから。

イスラエルを奴隷から解放した神は、万物の創造者（カオスから秩序を）である。天と地はそれ自体が神的ではない（脱呪術化)。ただし、人間の科学的技術的な介入へ開かれているとしても、それは現代の環境破壊に直結するものではない。

キリストを死から新しい永遠に生き生きとしている創造の自由へと導いた神は、万物の創造者であるばかりでなく、その完成者でもある。復活として弟子達に経験された出来事には、普遍的な終末論的地平が現前している。キリストの出来事において重要なのは神経験であるのだから、キリスト教的終末論は人間の終末論や彼岸的天における魂の救いに還元できない。身体なしの魂はなく、この地球上の生命システムなしに人間の現実存在はなく、また宇宙なしに地球はない。キリストの出来事の宇宙的次元。新約聖書のパウロ書簡などにおける宇宙的キリスト。

キリスト教的終末論の問い、人間的終末論と宇宙的終末論とは今日なおも調和しうるの

か。

２．Menschliche und kosmische Eschatologie

聖書的伝統は人間原理によって規定されている。

人間の創造とその中心的意義、この世界の終末は人間の終末と関連づけられる

現代科学の宇宙像

人間なしの宇宙、人間の見いだす生の有意味性とは、無意味性の海のただ中の意味の孤島のようなもの

パスカル、無限宇宙

宇宙への人間原理の導入を人間学への宇宙原理の導入によって補う

人間において宇宙を見る（最高に複雑で自己意識をもったシステムとしての人間）だけでなく、宇宙において人間を見る（人間の可能性の展開にとって最も広いコンテキストとしての宇宙）。人間の未来を宇宙の未来へと統合する。人間の思惟や理念の無尽蔵さと宇宙の諸状態の無尽蔵さ。人間は宇宙を認識するだけでなく、宇宙に構成的に関わると考えることはできないのか。宇宙の形成に対する人間の可能性を問わねばならないことになる。ＳＦ小説の世界。

不死の問題、宇宙への脱出、多宇宙モデル

生命と宇宙の際限のない未来は望ましいものなのか。死と過去とは新しい可能性が発展するための要因ではないのか。死と時間の克服によって、新しいものは失われてしまう。終わりなき世界は世界の終わりである。

意味概念における統合

作用連関まで議論できるか？

思考実験としてのＳＦ

アニメにおける終末論

永遠とは何か？

波多野精一『時と永遠』